日本現代文學全集 40

高村光太郎集

宮澤賢治集

日本現代文學全集 40

高村光太郎 宮澤賢治 集

講談社

日本現代文學全集
40

高村光太郎・宮澤賢治集

編集
伊藤整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

初版　第1刷
昭和38年2月19日
增補改訂版　第1刷
昭和55年5月26日

著者　高村光太郎
宮澤賢治

裝幀　蠟江征治

發行者　野間省一

發行所　株式會社　講談社

東京都文京區音羽2-12-21
郵便番號　112
電話東京03 (945) 1111(大代表)
振替　東京 8-3930

印刷　凸版印刷株式會社
製本　和田製本工業株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします
Printed in Japan

0395-106401-2253 (2)　(文1)

高村光太郎集　目次

卷頭寫眞
筆　蹟

道　程（全）……七
造型詩篇……四三
猛獸篇……四九
「道程」以後……五三
智惠子抄……六九
典　型（全）……七六
「典型」以後……九〇
ゼルハアラン詩集……九三
美について
ロダンの生涯……一〇四
ロダンとマイヨルとの好惡に就て……一〇五
觸覺の世界……一〇七
小刀の味……一一〇
書について……一一一
彫刻性について……一一三
自作肖像漫談……一一五
蟬の美と造型……一一八
能の彫刻美……一二〇
信親と鳴瀧……一二三
詩について
詩歌と音樂……一二五
生きた言葉……一二九
自分と詩との關係……一三一
某月某日……一三三
雅　歌……一三四

隨想

家……一三六
ある首の幻想……一三六
ルイ十六世所刑の圖……一三七
人の首……一三八
百三十五番……一四〇
裝幀について……一四一
九代目團十郎の首……一四一
手……一四三
ほくろ……一四三
制作現況……一四四
工房にて……一四五

智惠子のこと

智惠子の切拔繪……一四六
智惠子の半生……一四七

みちのく便り

開墾……一五五
夏の食事……一五七
山の雪……一五八
山の春……一六一
みちのく便り　四……一六三
山の秋……一六四

アトリエにて

父との關係……一六九
荻原守衛……一八三
燒失作品おぼえ書……一八八

ロダンの言葉

ゼヌス……一九五
フランスの自然……一九九
ランスの本寺……二〇三
夜の本寺……二〇八
本寺別記……二一一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

續ロダンの言葉
花について……二二三
女の肖像……二二六
藝術家の一日……二二八
手紙……二三三

作品解説……龜井勝一郎　四四三
高村光太郎入門……伊藤信吉　四五〇
年譜……四六一
參考文獻……四七五

宮澤賢治集　目次

卷頭寫眞
筆蹟

春と修羅　第一集（全）……二二七
春と修羅　第二集……二六八
春と修羅　第三集……二七八
春と修羅　第四集……二八五
疾中……二九一
手帳より……二九二

ポラーノの廣場……二九四
風の又三郎……三二八
銀河鐵道の夜……三五〇

土神と狐……三八〇
かしはばやしの夜……三八六
鹿踊りのはじまり……三九三
どんぐりと山猫……三九八
注文の多い料理店……四〇三
オッペルと象……四〇七
猫の事務所……四一二
茨海小學校……四一六
よだかの星……四二五
セロ弾きのゴーシュ……四二九

農民藝術概論綱要……四三八
農民藝術の興隆……四四一

作品解説……龜井勝一郎 四四七
宮澤賢治入門……伊藤信吉 四五六
年譜……四六九
參考文獻……四七七

村光太郎集

みちのくの
花菖蒲
人あまた
照沼を
うみき
墓をまはる

道程

失はれたるモナ・リザ

モナ・リザは歩み去れり
かの不思議なる微笑に銀の如き顫音を加へて
「よき人になれかし」と
とほく、はかなく、かなしげに
また、凱旋の將軍の夫人が偷視の如き
冷かにしてあたたかなる
銀の如き顫音を加へて
しづやかに、つつましやかに
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり
深く被はれたる煤色の假漆こそ
はれやかに解かれたれ
ながく畫堂の壁に閉ぢられたる
額ぶちこそは除かれたれ
敬虔の涙をたたへて
畫布にむかひたる

迷ひふかき裏切者の畫家こそはかなしけれ
ああ、畫家こそははかなけれ
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり
心弱く、痛ましけれど
手に權謀の力つよき
畫みれば淡綠に
夜みれば眞紅なる
かのアレキサンドルの靑玉の如き
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり
我が魂を脅し
我が生の燃燒に油をそそぎし
モナ・リザの唇はなほ微笑せり
ねたましきかな
モナ・リザは涙をながさず
ただ東洋の眞珠の如き
うるみある淡碧の齒をみせて微笑せり
額ぶちを離れたる
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり
かつてその不可思議に心をののき
逃亡を企てし我なれど
ああ、あやしきかな
歩み去るその後かげの慕はしさよ
幻の如く、又阿片を燔く烟の如く

消えなば、いかに悲しからむ
ああ、記念すべき霜月の末の日よ
モナ・リザは歩み去れり。

生けるもの

何事も戯にして、何事も戯ならず
戯ならずと言はむにはあまりに幼し
戯なりと言はば自ら悲し
我も生けるものなり
公園に散る新聞紙の如く
貧く、あぢきなく、たよりなく
雨にうたるるまで
生けるものをして望むがままに生かしめよ

根付の國

頬骨が出て、唇が厚くて、眼が三角で、名
人三五郎の彫つた根付の様な顔をして
魂をぬかれた様にぼかんとして
自分を知らない、こせこせした
命のやすい
見榮坊な
小さく固まつて、納まり返つた
猿の様な、狐の様な、もものがあの様な、
だぼはぜの様な、麥魚の様な、鬼瓦の様
な、茶碗のかけらの様な日本人

畫室の夜

暖爐の火は消えて
室の四すみよりいつとなく
寒さは電流の如く忍び入る
絹マントルの明るき光は瞬きもせず
物の色より黄を奪へり
亂雜なる畫室の樣のもの淋しさよ
今もわが頭の中に微笑せる彼の人を思へば
繪具と畫布とは兒戯に近し
――藝術は唯巧妙なる約束の因襲なるを――
むしろシャヴンヌの畫を嗤つて
一杯の酒に泣かむとす
寒さ烈し
冬の夜の午前二時

熊の毛皮

熊の毛皮の心地よさよ
なめらかに、さらさらと
肌にふる

その長き毛に頰をうづめよ
その黑き毛に身をなげかけよ
不思議なる歡樂は
血管を走る可し
湯より出でたる女等を
ところみに熊の毛皮に伏せしめよ
美しきものは
更に生きたる光を得む

熊の毛皮の心地よさよ
なめらかに、さらさらと
肌にふる

人形町

あの大丸も店仕舞をしたさうな
角の尾張屋の
大きなおろし小うり甘酒の行燈が
いま百八つの鐘の鳴り止んで
少しひつそりした
人形町にまだ見える

おもひなしか掃除の出來た
電車通りを歸つて來れば
横町に古風な白張提灯がひよつこりと――
何處かで鷄が啼く

甘栗

釜からあげた
清國名產甘栗の
やはらかい皮をむけば
琥珀の樣な栗の實が
ところころとところげたり
――みりんくさい湯氣がちる――
ワニラの酒に似た
舌つたるい甘さが
鬼の息のやうに體を包んだ
――氣の遠くなるやうな南清の大河
揚子江の岸の白楊に日があたる
チャルメラの唄が
とぼく、とぼく――

よせば可いのに、その時
ころげた栗の實を
拾つて拭いて手にのせた
お花さんのいたづら

庭の小鳥

――つうい、ちろちろ――
何の小鳥か庭に來て
めづらしい聲に啼く
――つうい、ちろちろ――
流暢なあの聲きけば
日本の鳥ではないさうな

亡命者

わが心は蝕へり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うつろに、くろく、しんしんと
潮時來れば堪へがたし

かの亡命の日の淋しさに
身を隱したる家なれど
猫の脊よりもうつくしき
黑髮をもつ少女等は
むざんなる力もて
ゐたりけり

女とは惡しきものの名なるかな
わがうつろなる心は
この名によりて痛し
女とはあやしきものの名なるかな
わがおびえたる心は
この名によりてをののけり

げに女こそ世にも悲しきものなれ
わがさびしき心は
この名によりて寂寥を極む
げに女こそ世にも呪ふべきものなれ
わがあたたかき心は
この名によりて、見よ凍らむとす

女よ
されど我に調伏の力なし
ただ哀れなる俳優のごとく
人知れず、ものの陰より
しづやかに、しとやかに

何時となく
舞臺を去らざるべからず——
わが心は蝕へり
靜かなる夜も、しんしんと
潮時來れば堪へがたし

鳩

鳩に豆やろ、豆くへ、鳩よ
鳩が豆くふ、親鳩子鳩
馴れて吾が手に豆くふ子鳩
觀音堂に夕日がさせば
鳩を見てさへ泣いたもの

食後の酒

青白き瓦斯の光に輝きて
吾がベネヂクチンの靜物畫は
忘れられたる如く壁に懸れり
食器棚の鏡にはさまざまの酒の色と
さまざまの客の姿と
さまざまの食器とうつれり

流し來る月琴の調は
幼くしてしかも悲し
かすかに胡弓のひびきさへす
わが顏は熱し、吾が心は冷ゆ
辛き酒を再びわれにすすむる
マドモワゼル、ウメの瞳のふかさ

寂寥

赤き辭典に
葬列の步調あり
火の氣なき暖爐は
鑛山にひびく杜鵑の聲に耳かたむけ
力士小野川の嗟嘆は
よごれたる絨毯の花模樣にひそめり

何者か來り
窓のすり硝子に、ひたひたと
燐をそそぐ、ひたひたと——
黃昏はこの時赤きインキを過ち流せり
何處にか走らざるべからず
走るべき處なし
何事か爲さざるべからず
爲すべき事なし
坐するに堪へず
脅迫は大地に滿てり

いつしか我は白のフランネルに身を捲き
蒸風呂より出でたる困憊を心にいだいて
しきりに電磁學の原理を夢む

朱肉は塵埃に白けて
今日の佛滅の黒星を嗤ひ
晴雨計は今大擾亂を起しつつ
月は重量を失ひて海に浮べり

鶴香水は封筒に默し
何處よりともなく、折檻に泣く
お酌の悲鳴きこゆ

ああ、走るべき道を敎へよ
爲すべき事を知らしめよ
氷河の底は火の如くに痛し
痛し、痛し

聲

止せ、止せ
みじんこ生活の都會が何だ
ピアノの鍵盤に腰かけた樣な驢音と
固まりついたパレット面の樣な混濁と
その中で泥水を飲みながら
朝と晩に追はれて
高ぶつた神經に顫へながらも
レッテルを貼つた武具に身を固めて
道を行く其の態は何だ

平原に來い
牛が居る
馬が居る
貴樣一人や二人の生活には有り餘る命の糧が地面から湧いて出る
透きとほつた空氣の味を食べてみろ
そして靜かに人間の生活といふものを考へろ
すべてを棄てて兎に角石狩の平原に來い

そんな隱退主義に耳をかすな
牛が居て、馬が居たら、どうするのだ
用心しろ
繪に畫いた牛や馬は綺麗だが
生きた牛や馬は人間よりも不潔だぞ
命の糧は地面からばかり出るのぢやない
都會の路傍に堆く積んであるのを見ろ
そして人間の生活といふものを考へる前に
まづぢつと翫味しようと試みろ

自然に向へ
人間を思ふよりも生きた者を先に思へ
自己の王國に主たれ
惡に背け

汝を生んだのは都會だ
都會が離れられると思ふか
人間は人間の爲した事を尊重しろ
自然よりも人工に意味ある事を知れ

惡に面せよ
PARADIS ARTIFICIEL !

馬鹿
自ら害ぶものよ

馬鹿
自ら卑しむるものよ

風

はるばると椿の多い三宅島から
油壺のやうな黒潮を超えて
いい心持に
氣隨氣儘な八つ當りさへさんざ爲て
はねて、けつて、とんで
とんで、躍つて
都へ渡つた南かぜ——
されば
茨の刺の靑むと一緒に
通る女も、通る女も
みんな油くさくなつた

新綠の毒素

靑くさき新綠の毒素は世に滿てり
野といはず山といはず
街の垣根、路傍の草叢

置き忘れたる卓上の石の如き覇王樹に至る
まで
今は神經に動亂を起して
ひそかに廻る生の脈搏
狂ほしき命の力
止みがたき機能の覺醒に驚きつつ
溢れ出づる新綠を
その口より吐き出だしたり
青くさき新綠の毒素は世に滿てり

生命の過剩
形を備へざる勢力
あかつき
鷄の觸神をそそりて
世にも不思議なる
かの鷄鳴を吐かしむる力
ありとある媚藥
ありとある香料も
いまだ此の力の避けがたきに及ばず
青くさき新綠の毒素は世に滿てり

その味ひは直ちに人の肌を刺し
そのかをりはたちまち人の血管を襲ひて
我はこの時心臟の眩く重壓に堪へず
しかも、何事か絶叫せざるべからざる喜悅
と驕慢と來れば
手は新しく物に觸れ
足は雀躍してただ前進せむとす
——されば、されば
苦しき忘我と
たのしき疼痛とは
地殼より湧き出づる精液の放射
物のすべてに染み渡れるこの奇臭に因りて
痛まし
青くさき新綠の毒素は世に滿てり

姙みたる瘠犬は共同墓地に潜みて病菌に齒
を鳴らし
蛇は安らかなる冬の眠よりめざめて
再び呪はれたる地上に腹這ひ嘆かざるべか
らず
二十日鼠は天井裏に交み
磯巾着は氣味惡き擬手を動かす
ああ、禽獸蟲魚
悉く無益なる性の昂奮に
虐殺と猜疑と狂奔とにいがみ合へり
青くさき新綠の毒素は世に滿てり

見よ
河岸隨一の醜女
櫓屋のおちかは溜息して
まろき乳首をまさぐり泣けり
見よ
宗林寺の納所坊主
青瓢簞の妙圓は朝の勤行に船をこぎ
門前の下駄屋に赤き鼻緒ををのき見つむ
見よ
大野屋の手代
四十男の佐太郎は
路地のくらやみに世にも始めて白鼠となれ
り
見よ
金庫を傾けて新しき紙幣の束を握り
上氣したる青女房は素足も輕く
間夫の清人劉一章と廣東に走れり
見よ、見よ、見よ
青くさき新綠の毒素は世に滿てり

家に入れど
臥床に入れど
沐浴すれど
にがき膽をなむれど
三味を聞けど
歌を聽けど
飲めど
泣けど
ともねすれど
まろねすれど
いづくまでも、いづくまでも
息ぐるしき辛辣のただよひは
我が身を包み、我が魂をとどろかす
あはれ、あはれ

青くさき新緑の毒素は世に滿てり

廢頽者より

——バアナアド・リイチ君に呈す——

寛仁にして眞摯なる友よ
わが敬愛するアングロサクソンの血族なる
　友よ
君のあつき友情を思へば余は殆ど泣かむと
　す
めづらしき夕立の
チエルジイを襲ひて白き烟を上げたるかの
　日
余は初めて君の手を握れるなりき

寛仁にして眞摯なる友よ
君は余に圖り、余を信じて
運命の如く
遠きわが日本に何物をか慕ひ來れり
ああ、やがて其は三年にもなりなむ
友よ
君は常に燃ゆるが如き心を以て余に向へる
　に
余は狐の如く、また鼬の如く
君の心を側に置きて
醜惡なる生活に身を匿せり
西に奔り、南に走せ、復りては又往きつつ

寛仁にして眞摯なる友よ
君は靜かなる深き瞳に物を思ひて
余の爲に悲しみたり
おのづから消えゆく寫眞のたよりなき悲し
　みの如く
落つる花の詮なきごとく
ゆく雲の止みがたきを思ふごとく——
櫻さき、廣重の水の流るる日本にして
友よ
君はいかに淋しかりけむ
君の結婚と愛兒の誕生との間にも
君が眉のあたりには尙ほ何物か潜みたりき
君はつひに怒らず
またあきらむる事をせず
疲れたる余を見ては
チエルジイに於けるが如く今も語る

寛仁にして眞摯なる友よ
君は知りつくし給ふならむ
余の悲しさの極まれるを
余の絶望と、余の反抗と
余の不滿と、余の奮勵との
つねに矛盾し、つねに爭鬪して
余を困憊せしめ
さらに寂しき涙に誘ひ行くを
余のまことに不倫なる自暴自棄の心をいだ
　けるを
また理不盡なる難題に
解くべからざる結繩に

自らを苦しむるを
人として最も卑しき弱き心
直に極端を思ひ
ともすれば非常事に走する心の
余に藏れたるを
しかれどもまた
君は知りつくし給ふならむ
いかにして斯かるかを

寛仁にして眞摯なる友よ
憤りは余に苛責を加へたり
ニルヴナの花はあとを留めず
軒を見れども青き鳥は啼かず
君に故郷あり
余に故郷なし
余は選ばれたる試みの世界に
最も弱きものとして生れたり
余は、むしろ、余の贅澤に似たる苦痛
この我執ある懊惱を憎む
友よ
余を目して孤獨を守る者となす事なかれ
余に轉化は來るべし
恐ろしき改造は來るべし
何時なるを知らず
ただ明らかに余は淸められむ
友よ
余は再びチエルジイに於けるが如く君の手
　を握らむが爲に祈る

「河内屋與兵衛」

夜があけて眼がさめると
妹の莚若もほんのりと顏を上げる
大阪の油屋……
窓に日がさし
脚燈がためいきすれば
暗い見物は半ば口をあけ
咲きかけた睡蓮の心もちで默つて見つめる
道具うらでとんと躓つまづく音
波紋のやうに靜かな舞臺の顫慄

さんたまりや

無頼の隨一
河内屋與兵衛のあこがれこそ悲しけれ
丁髷太きどんふあんの眼こそ痛はしけれ
左團次の獨白に銀の雨亂れかかり
魂ぬけてふうわりと
絲にひかるるや
長崎へ
くるりどの音さへ狂ほし
あれ、莚若も長崎へゆく
長崎へ

さんたまりや、さんたまりや

髪を洗ふ女

水道の水は止め度もなく
あの人の金使ひに似て流れる
洗粉の手ざはりつめたく
返した人の後姿がなぜかしよんぼり氣にかかる
風呂にただよふ名も知れぬほのかな匂ひは
たよりないよな、あるやうな
ついこのごろの、されば、人のそぶりか
むしやくしや腹に髪を洗へば
髪さへ痩せて櫛もすべりぬ
大河で鳴る汽船の笛が
ふいと消えればどうやら涙が
どうやら涙がにじみ出す

わが幻覺のあやしさよ
濱町河岸の夏のあさ

「心中宵庚申」

死んでも去りは仕りませぬと
立派に誓言しやつた仁左衛門が
あれ、去り狀を書く
女房のお千代どのに——

ぢつと嚙みしめたふところ紙を落して
思はず驚く成駒屋の顏

梅雨の夜風が何處からか吹いて來て
ちよぼでは、わつと泣き落す

ふるい、ふるい人情の烈しいひかりが
もののかげから忍んで泣く
死ぬるは切ない美しさ
今の世でも

夏

夏になればじとじとと
梅雨にしめつた夜具蒲團
桐の簞笥の着物から
モロッコ革の詩集まで
くわつと照り出す暑い日の
溫氣に蒸れて、それ、燐の香のする
青い、けうとい、もののものしい
黴が這ひつき花が咲く

夏になればてらてらと
屋根の瓦が照り返し
入道雲も上せつつ
うろん臭げなうす笑ひ
物もうごかぬ眞日晝に
いきり立つ水氣の憎さ
やがてつもれば、どうせ不祥な
雷さまがわめき出す

夏になればすばすばと

ふかす烟草もあぢきなく
烟管なげ出しぢれついて
つい有り合ひの、處きらはぬ難題に
男困らす人の癖
きりきりと嚙む貝殼の
音がこたへて詮もなく
しん底夏には身をそがれる
そのまた夏が來るのかね

なまけもの

淺草は
雷門のよか樓の畫のけうとさ
ひろびろと靜かな二階の
白い食卓には斜に並木の新綠がしみ
栗色のリノリアムは足もとで微かな彈力に
　ささやき
狂つた時計は六時を指す
霧島つつじの眞赤なかげに
サツポロの泡をみつむる
マドモワゼルもねむたし
三階にだるい稽古の細棹
その絲につれてそつとうつ足拍子も
いつか止んでものみなねむたし
なまけものはベネヂクチンをなめて
過ぎゆく時のゆるやかなテンポをたのしみ
こころに基督の禁をやぶる
ぼんやりとした春の末
觀音さまに程近い
美人料理の畫のけうとさ
さてもその時ふいと聞えるものの聲
「雷門の定見世で
とんだりはねたり變つたり、やれな」

手

わが手を見ればうとまし
昨日病院の白き部屋に見たる
かの瓶詰の手と
さまで變らずなまなましきものを
手のみかは……

金秤

アルミニウムの金秤
上二匁の分秤
風もないのにぢりぢりと
日がな一日ふるへては
休む瀨のない氣のくばり
白くまぶしいモルヒネが
ひらりと乘れば金秤
胴ぶるひして身をたふす
夏のさ中にいぢらしい
アルミニウムの金秤

はかなごと

つい言ひ出したことはなけれど
言ひ出さねばわからぬものか
云ひ出さぬままに
いつしか過ぎぬれば
むかしの思は夢のやうにて
唄のやうにて
こころにかかつた名も知らぬなやみは
薄いほくろか、ほろりと取れける
さびしや

めくり暦

めくり暦のさびしさよ
昨日も今日も裂いて取る
あすもあさても裂いて取る
裂いてつきればお正月
裂いてつきるはよけれども
かうして棄てた紙屑に
さてもよくよく似た女——
めくり暦のさびしさよ

地上のモナ・リザ

モナ・リザよ、モナ・リザよ
モナ・リザはとこしへに地を歩む事なかれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com